

電子オルガンの持続音と声楽のパートナーシップ

～多音色多機能であること以前に持続音を扱える楽器としての存在感～

森松 慶子

1 電子オルガンの声楽伴奏で一般に期待されること
電子オルガンの特徴が話題になると、必ずと言って
良いほどこの楽器が多音色を扱えることが挙げられる。

また少し詳しい人であれば、オートリズム、シーケンスや自動伴奏などの多機能性にも触れることが多い。

1950年代末～1960年代初頭の日本最初期の電子オルガンは、今から思えば多音色というほどでもなく¹、機能という点ではピブラートやサステイン等若干のエフェクトがあった程度で、オートリズムその他の演奏補助機能は皆無であった。それでも、それぞれの時代で電子オルガンは常に「多音色を奏でられる楽器」と言われ、現在の感覚では他の楽器をさほど再現できる音色でもなかった頃から「オーケストラやバンドの奏者の仕事なくなる」と危険視されることさえあった。

そのような楽器であるので、電子オルガンが伴奏を務める場合(伴奏に限らないが)、複数の音色を使って、演奏全体の印象を多彩で華やかなものにするのを期待される。音色的な表現の幅(シンプルさと豪華さの振幅)や音量的な幅が大きい電子オルガンはそのような役目を十分果たせる楽器である。

しかし、電子オルガンは、多音色が出せるということ以前に、持続音での表現が可能である、という基礎的な仕様に恵まれている。またこの持続音を、足で加減する強弱ペダルや、80年代後半以降は大方の機種で、鍵盤のタッチによって音量音質ともに変化させることができる。これは音楽的なニュアンスを表現するにあたっては非常に大きなメリットである。

この報告文は、電子オルガンが単音色のみを用いて

も、持続音を扱える鍵盤楽器として十分存在感があることを、実体験を交えて記すものである。

2 変化しない持続音と変化する持続音

持続音の出る電子オルガン、とまずは大雑把にくくったが、持続している音が基本的に変化しない伝統的なオルガンに対して、現在の電子オルガンは、持続音にも奏法で変化を与えることが普通である。持続するその音を、音量・音質ともにペダルやタッチで変化させられることは、今や、電子オルガンの持続音の表現にとって非常に重要なのである。

筆者は、東京芸術大学の音響学の授業で白砂昭一先生が1990年代に「パイプオルガンの持続音は、基本的には音が出てから変化をつけない。最近の電子オルガンは、打鍵した後もタッチその他で変化をつけるようになってきた。これは実は、すでに“オルガン”の名前でくくれる楽器の域を超えているということだ」と語られるのを興味深く拝聴した。

電子オルガンの音色の中でも、パイプオルガンやジャズオルガン系の音色は、元々の特性に倣って、打鍵の瞬間のタッチによる音の違いや、打鍵後の音の変化はない。一方、管弦系の音色は、打鍵の瞬間のタッチによる音量・音質の変化や、打鍵後、鍵盤に対してどのくらいの圧力をかけるのか、逆に抜くのか、によって、音量・音質が変化する。このタッチによる変化に加えて、足で加減する強弱ペダルによって、楽器全体の音量を加減する。

電子オルガンにさほど馴染みのない人達の前でこの楽器を演奏すると、ほぼ単音色のみで演奏していても、「いろいろな音が出てきてカラフルだ」という感想を聞くことが少なくない。電子オルガンの、変化する持続音による表現は、普段この楽器を当たり前演奏している自分たちが思うよりもずっと聴衆にとって雄弁であり、たとえ単音色で演奏したとしても多彩な印象

¹ 日本国産初の電子オルガン、ピクトロン EO-4420 (日本ビクター、1958年)も翌年発売されたエレクトーン D-1 (ヤマハ、1959年)も上下手鍵盤と足鍵盤合わせて10数音色であった。2017年現在は、アトリエ AT-800 (ローランド)が約450音色、ドリマトーン DT-9 (カワイ)が約850音色、エレクトーンステージア ELS-02C (ヤマハ)が約1100音色である。

を与えるのである。

3 単音色によるオペラの“稽古電子オルガン”

電子オルガンは多音色に依らずとも、持続音の表現力だけで十分音楽的な表現が可能である、ということは、前々から筆者自身も感じており²、適当な場があれば、コンサートにそういう趣向のものを数曲取り入れてみたりしていたが、オペラやコンチェルトのオーケストラパートを電子オルガンで務める時には、オーケストラのイメージを意識して保つ場合も、あえてそうしない場合も、当たり前のように複数の音色を使ったレジストレーションを用意していた。そして、共演者もそのことを歓迎してくれていた。

筆者は2017年夏に、本番はオーケストラ伴奏によるオペラ「カルメン」の、合唱練習用稽古ピアノを担当することになった。筆者の他に3人の稽古ピアニストがおり、日程と場面を分担して練習に立ち会った。筆者は、ポータブルな電子オルガンを持参して、いわゆる稽古電子オルガンと言った体であった。稽古用ということであり、他の人はピアノでの演奏でもあることで、自分もオペラのオーケストラパートを電子オルガンで、単音色で演奏することにさしたる抵抗もなく、「カルメン」のピアノ・ヴォーカルスコアを見ながら全体のスケッチのような感覚で、和声感とリズム感、曲全体の雰囲気を作りやすく合唱団に伝えることに重点を置いた伴奏することにした。音色はストリングスのみで行った。幅広い音域で使用するのに無理がなく、適宜重音と単音を取り混ぜて、その場その場で必要な音を拾うことがし易い音色だからである。

実際の稽古では、オペラの各場面を表情豊かに演出するオーケストラパートをストリングス一色で演奏しながら、筆者自身が物足りなさを感じずともなく、軽やかな場面、密やかな場面、賑やかな場面のそれぞれの表情を、楽しんで演奏することができた。また、ストリングスの音色のみの伴奏であっても、合唱の方々にとっては多音色で演奏しているような印象があ

²筆者が立ち上げの時からスタッフを務めているアマービレ電子オルガンコンテスト（第1回大会2011年開催。2017年現在2018年4月の第6回大会準備中）では、毎回単音色に絞ったレジストレーション1つで全曲を演奏する課題曲部門を設け、シンプルな設定の中で奏者が演奏表現を磨く場としている。

ったそうである。筆者は人前で、全く1音色でオーケストラ曲を演奏するということが今回が初めてであったが、それでも練習にいらしていた方々の歌っている最中の反応や、直接言ってくださる感想から、実際にいろいろな音色を使うこと以前に、変化する持続音自体の雄弁さが、表現力のあるピアニストが実現する多彩さとはまた別の、一種のカラフルな印象を生み出すのだという感触を得た。

4 歌い手に寄り添う持続音の伴奏

オペラ・アリアその他の独唱のために書かれた歌曲の伴奏を電子オルガンで務める際も、この楽器が変化する持続音を扱う楽器であることの良さと難しさ、そしてやりがいを実感する。

筆者が歌曲の伴奏を務める際は、もともとピアノ伴奏、もしくはオーケストラ伴奏をピアノで演奏されているところに、電子オルガンで取って代わるというケースが殆どで、歌い手は馴染んだピアノ伴奏から電子オルガン伴奏に乗り換える、ということになる。

従来、ピアノ伴奏に慣れている人にとって電子オルガンは音の出が遅かったり不明瞭だったりして、合わせにくい、と言われることが多い。筆者もそれなりに注意している。しかし筆者とここ数年コンサートやオペラで度々共演して下さっているソプラノ歌手の楠本未来氏は、電子オルガン伴奏について以下のように語った。

「自分は、電子オルガンの伴奏の音の出が遅いと感じてそれが気になるということは全くない。もともとオーケストラ伴奏であれば、ピアノのように頭がはっきりしているということはないのでピアノを基準にすることもない。それよりも、電子オルガンの持続音と自分の声を描く線が並んで弧を描いて進んでいく感覚が非常に心地よく、そこに意識を集中している。

ただしそれは非常に気が抜けない過程でもあり、ピアノ伴奏であれば、自分の声イメージした弧を描き損ねて失速したとしても、ピアノの音は弧を描き始めたところで鳴ってその後減衰していなくなっており、次にピアノが鳴るところまでの間に帳尻を合わせれば良いし、気心の知れたピアノ伴奏者は声が落ちていくところに適当に合わせて拾ってくれる。

自分が描きたいと思っている弧のイメージを心得た伴奏者が共有してくれているのは、ピアノも電子オル

ガンも同じである。電子オルガンの場合には持続音が出るので、実際に自分と一緒にその弧を描いてくれる。だから、自分が途中で弧を描き損ねてしまうと、ごまかしがきかない、という緊張感がある。しかし演奏としては、イメージを共有し、それをお互いが形にできるという点で、電子オルガン伴奏で歌うことは自分にとって非常に楽しい。

自分の生徒については、どのような弧を描くかというイメージを生徒自身がかもっと豊かにして欲しいと感じている。ピアノ伴奏で、多少失速しても合わせてもらうのに慣れてしまうと、描き損ねの弧でもなとなかなくなってしまふ、と思ってしまうかもしれない。生徒にも電子オルガンでの伴奏で歌う機会を作りたい」

楠本氏のこの発言は、電子オルガンが多彩な音色を扱えるということとは別に、この楽器が変化する持続音を扱える、という部分を取り上げたものである。

筆者は楠本氏始め、独唱の伴奏を務める際、例えば声が緩やかな弧を描いて登っていき、あるところでは、電子オルガンの持続音が声を押し上げるようにクレッシェンドし、頂点でしばらく声を支えるように緊張感を維持し、声が降りようとする手前の時点で電子オルガンの方が先に脱力（音量としてはディミヌエンド）して声が降りる場所を空けるようなイメージで演奏している。

そうした自分の中でのイメージを、特に楠本氏に言葉で説明したり打ち合わせたりすることはなかったのだが、氏が筆者のイメージを丸ごと把握してくださっていたことには大きな喜びと感謝を覚えた。変化する持続音について共演者から言及してもらえるとすることは、電子オルガンに関して、奏者同士の音楽的な話をしてもらえているということだからである。

4 「電子オルガンの話」から「電子オルガン演奏の話」へ

電子オルガンについてよく言及される音色の多彩さは楽器の性能に関する事柄であるが、楠本氏が電子オルガンの面白さとして前段で語っているのは、奏者との音によるコミュニケーションにまで踏み込んだ事柄である。音色的な多彩さや、現代的な諸機能の陰になっている感はあるが、変化する持続音の豊かな表現（たとえ単音色でも複数の音色を使っても）を強く意識することは、即ち電子オルガン奏者の演奏の充実、共演

者との音でのコミュニケーションの充実に繋がる。

筆者は電子オルガンが単音色でも雄弁に表現できるような、そのような演奏技量を磨かなければいけない、とかねてから考えており、前述の通りそれなりの実践や試みもしてきてはいた。しかし、「カルメン」の稽古電子オルガンで、稽古とはいえ、公衆の面前でオーケストラ曲を単音色で演奏するという経験を初めてしてみ、改めて、単音色であっても変化する持続音はそれだけで非常に表情豊かであり、それは自分が楽しいだけでなく聴き手にも十分伝わる、ということを実感できた。さらに楠本氏の、音色の寡多に関係ない、奏者の持続音による表現を直接取り上げる言葉に触れることができ、電子オルガンに関わる者として、持続音に対する感度を磨くことの大切さを再認識した。

電子オルガン奏者としてさまざまな現場に出向くと、当然のことながら多彩な音色や便利な諸機能に対して興味を持たれたり、こちらもそれを生かして相手の期待に応えようとしたりすることが多くなる。しかし、そこにとどまらず、演奏者同士の演奏体感に密着した感触を互いが認識し、またその感触についての話ができるようになって、ようやく音楽的なパートナーシップを結べたと言えるのではないだろうか。

様々な現場で、これまでも、現在も電子オルガン奏者とその共演者との間で様々なやり取り（音楽によるやり取りもあれば、言葉によるやり取りもあるだろう）が行われている。また、これから現場に出て行こうとする若い世代の電子オルガン奏者も育って来ている。すでに機能や音色の話は卒業して、音楽的なやり取りを当たり前のように交わしている経験豊かな電子オルガン奏者もいらっしやれば、電子オルガンの音色や機能の説明で手一杯、という現場もあるだろう。電子オルガンが楽器であり、電子オルガン奏者が音楽家であるならば、最終的には演奏自体、音楽自体についての言葉や演奏でのコミュニケーションにこそ重点が置かれるべきであり、その部分であてにされる存在でありたい。その一つの足がかりが、変化する持続音の表現にある。これが今回「カルメン」の稽古電子オルガンの経験と、ソプラノ歌手・楠本未来氏の、問わず語りの発言から筆者が至った結論である。

（音楽ライター・電子オルガン演奏 もりまつ けいこ）